

小学校における語彙指導をめぐる

堀 畑 正 臣

キーワード…小学校、語彙指導、上位語・同位語・下位語、
対義語、慣用句、諺、故事成語、熟語の構成

はじめに

新しい学習指導要領が平成二九年三月に公示された。今後、移行期間に入り平成三二年度より実施される。今回、読んでみて小学校における語彙指導の充実が指摘されているのを改めて知った。語彙指導について日本語学の方から日頃考えていることを述べて、新たな教材化の視点を提示する。紙数の関係から取り上げるのは「上位語・同位語・下位語」「対義語」「慣用句」「諺と故事成語」「熟語の構成（接頭語・接尾語・複合語・連濁等）」である。

一 学習指導要領の改訂と語彙指導の観点

〔第1学年及び第2学年〕の「2 内容」の（1）オに、
オ 身近なことを表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにすること。

とある。（傍線堀畑以下同じ。）

〔第3学年及び第4学年〕の「2 内容」の（1）オには、
オ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすること。

〔第5学年及び第6学年〕の「2 内容」の（1）オには、
オ 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使う

とともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと。

とある。これは、「小学校の第1学年及び第2学年の段階から語彙の量と質を豊かにすることが、全ての教科等における学習の基盤となる言語能力の育成につながる」ことから、今回の改訂において新設したものである」と語彙指導の充実が述べられている(注1)。これをまとめたのが表一である。

表一 「語彙の種類とその観点」として示したところが、語彙の種類
新学習指導要領の語彙指導のまとめ

学年	語彙の種類とその観点	語彙指導の方向
1年	身近なことを表す語句の量を増す	話や文章の中で使う A
2年	意味による語句のまとまりを知る	語彙を豊かにする B
3年	様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増す	話や文章の中で使う A
4年	性質や役割による語句のまとまりがあることを理解する	語彙を豊かにする B
5年	思考に関わる語句の量を増す	話や文章の中で使う A
6年	語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解する	語彙を豊かにする B
	語感や言葉の使い方に対する感覚を意識する	語や語句を使う C

類と語彙のまとまりである。語彙には二つの面がある。一つは「言葉の集まり」であり、もう一つは「言葉の意味体系のまとまり」である。また、「語彙指導の方向」として、「A 話や文章の中で使う」「B 語彙を豊かにする」「C 語や語句を使う」がある。こちらは、語彙を知り、それを話や文章で使うことで語彙を豊かにしていくものである。

二 「理解語彙」から「表現(使用)語彙」へ

語彙指導には、「語彙の種類とその観点」と「語彙指導の方向」があると述べた。ここでは「語彙指導の方向」から述べる。語彙の概念に「理解語彙」と「表現(使用)語彙」がある。「理解語彙」とは、読んで理解できる語彙、聞いて理解できる語彙のことである。「表現(使用)語彙」とは、話したり書いたりして表現することができると語彙のことである。「使用語彙」(以下「表現語彙」で記載する)ともいう。「理解語彙」として読んだり、聞いたりして理解することはできるが、「表現語彙」としてそれを話に使用したり、文章に書いたりとはなかなかできないものである。小学校では、言葉や語句の学習、漢字の学習を積み上げていくが、それらを「理解語彙」から「表現語彙」に変えて定着させることが大事である。「B 語彙を豊かにする」ことを行い、それを「A 話や文章の中で使う」や「C 語や語句を使う」ことで「表現語彙」に変えてい

くことを新学習指導要領も提唱しているのである。

小学校一年生（満六歳）の理解語彙に関する調査として、表二のような調査報告がある。古い調査でもあり、調査方法にもばらつきがあるようで単純に比較はできないが、凡そ満六歳の小学校一年生は四千から五千程度の理解語彙を持っていることが分かるものである。

表二 小学校一年生（満六歳）の理解語彙

東京成城小学校	4、089語	長田新ほか「児童語彙の研究」
千葉鳴浜小学校	5、021語	「新入学児童の語彙の調査」
岡山師範附属小	5、230語	「児童の語彙と教育」

阪本一郎氏の理解語彙の調査^(注2)では表三のようになる。この調査では小学校一年生の段階で6、700語の理解語彙を持っている。調査の仕方や一年生の調査時期など違いがあり一概には判断はできない。しかし、一人の理解語彙の年齢別変化として一年間で語彙がどれだけ増えたかという点では貴重な資料である。年々の一年間の獲得語彙の増加数を表四に示した。それによると11歳から12歳の一年間の語彙増加数が一番高く、6、342語を数える。10歳から11歳の増加数5、448語と12歳から13歳の増加数5、572語を合わせると、10歳から13歳までで17、362語、9歳から10歳の

3、602語を加えると20、964語となる。この被験者の二〇歳段階の語彙数が48、336語であるので、小学校三年生から六年生の間で43・3%もの語彙を習得している。小学校中学年と高学年における理解語彙の習得状況が顕著であり、この時期の語彙指導が大切で有効である。問題はこの理解語彙を表現語彙に代えて定着させることである。新学習指導要領もその点を指摘している。

表三 語彙量の年齢別変化

年齢	理解語彙の量
7歳	6、700
8歳	7、971
9歳	10、276
10歳	13、876
11歳	19、326
12歳	25、668
13歳	31、240
14歳	36、229
15歳	40、462
16歳	43、919
17歳	46、440
18歳	47、829
19歳	48、267
20歳	48、336

表四 一年間の語彙増加数

何歳から何歳	一年間の語彙増加数
7歳から8歳	1、271
8歳から9歳	2、305
9歳から10歳	3、602
10歳から11歳	5、448
11歳から12歳	6、342
12歳から13歳	5、572
13歳から14歳	4、789
14歳から15歳	4、233
15歳から16歳	3、457
16歳から17歳	2、521
17歳から18歳	1、389
18歳から19歳	438
19歳から20歳	69

三 小学校学習指導要領解説 国語編

(平成29年6月)

新学習指導要領に示す内容を表一で「語彙の種類とその観点」として示した。それらに対する解説を『小学校学習指導要領解説 国語編 平成29年6月 文部科学省』で確認しておこう。

「第1学年、及び第2学年」の「身近なことを表す語句の量を増す」と「意味による語句のまとまりを知る」に対する解説は、意味による語句のまとまりとは、ある語句を中心として、同義語や類義語、対義語など、その語句と様々な意味関係にある語句が集まって構成している集合である。例えば、動物や果物の名前を表す語句、色や形を表す語句などは、相互に関係のある語句として一つのまとまりを構成している。(45頁)

とある。ここからは「動物」「果物」の語彙、「色」「形」の語彙など、身近にある語句のあるまとまりの範疇で集めて、語彙の量を増やすことが考えられる。

「第3学年、及び第4学年」の「様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増す」と「性質や役割による語句のまとまりがあることを理解する」については、

様子や行動、気持ちや性格を表す語句とは、事柄や人

物などの様子や特徴を表す語句、人物などの行動や気持ち、性格を表す語句などを指す。これらを話や文章の中で使うことを通して、自分の語彙として身に付けていくことが重要である。

性質や役割による語句のまとまりがあることを理解するとは、様々な語句を、その特徴や使い方によって類別して捉えるということである。性質による語句のまとまりとは、物の名前を表す語句や、動きを表す語句、様子を表す語句などのまとまりのことである。役割による語句のまとまりとは、文の主語になる語句、述語になる語句、修飾する語句などのまとまりのことである。(81頁)

とある。「様子や行動、気持ちや性格を表す語句とは、事柄や人物などの様子や特徴を表す語句、人物などの行動や気持ち、性格を表す語句などを指す」として、物語文などでそれらに

表五 性質と役割による語句のまとまりの分類

性質による語句のまとまり	役割による語句のまとまり
①物の名前を表す語句(名詞) ②動きを表す語句(動詞) ③様子を表す語句(形容詞・形容動詞・副詞)	④文の主語になる語句(名詞・代名詞) ⑤述語になる語句(動詞、形容詞、形容動詞、名詞+だ) ⑥修飾する語句(形容詞、形容動詞、副詞、動詞+て)

いる語句の数を増やすだけでなく、話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化などへの理解を通して、語句の意味や使い方に対する認識を深め、語彙の質を高めることである。語感や言葉の使い方に対する感覚とは、言葉や文、文章について、その正しさや適切さを判断したり、美しさ、柔らかさ、リズムなどを感じ取ったりする感覚のことである。こうしたことを意識して、語や語句を使うためには、多くの文章を繰り返し読んで優れた表現に触れたり、自分の表現に生かしたりして、語感や言葉の使い方に関する感覚を養うことが重要である。(119頁)

と述べる。「言葉や文、文章について、その正しさや適切さを判断したり、美しさ、柔らかさ、リズムなどを感じ取ったりする感覚」を養うこと。そのためには「多くの文章を繰り返し読んで優れた表現に触れたり、自分の表現に生かしたりして、語感や言葉の使い方に関する感覚を養うこと」(119頁)が重要であると述べている。教壇に立つ教員の読書量と文章力の力量形成が問われている。

四 語彙指導の理論と方法

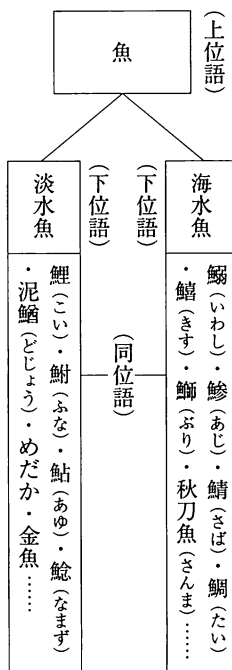
四の1 上位語・同位語・下位語

新学習指導要領の内容とその解説を眺めてきたが、それら

を踏まえ、語彙指導をどのように行おうかを考えてみる。
まずは、「類義語」と「上位語 同位語・下位語」の概念を使い、言葉には「意味によるまとまり」があることを知り、それらを分類してみよう。

例えば、「鯉(こい)」「鮒(ふな)」「鮎(あゆ)」「泥鰌(どじょう)」「鯰(なまず)」は意味のまとまりからは「淡水魚」になる。「淡水魚」に対して「海水魚」というまとまりがある。魚に関する「類義語」を分類すると図1のようになる。「魚」が上位語で、「淡水魚」と「海水魚」が下位語である。「海水魚」と「淡水魚」の関係は「同位語」である。

図1



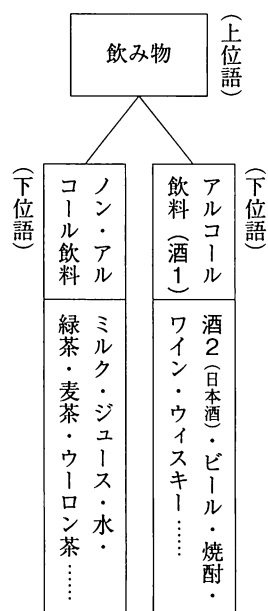
魚の場合は、「川魚」「海魚」という分類や「熱帯魚」という分類もある。小学校低学年の語彙の指導では「身近なことを表す語句の量を増す」というのが目的であるので、「魚」の場合は「魚」の言葉をあげていって、「意味による語句のまとまりを知る」という点では大まかに「海水魚」と「淡水魚」

の違いを押さえる程度で十分である。地域の子どもには「魚」の方言名を知っている子ども達もいる。また、日本の魚の名前には成長するにつれて名前が変わるものもある。例えば、

小学館『日本国語大辞典』（第二版）によると、「鰯（ぶり）」は、「成長につれて呼び名の変わる出世魚で、小さい順に、東京付近ではワカシ・イナダ・ワラサ・ブリ、大阪付近ではツバス・ハマチ・メジロ・ブリと呼ぶ。また、近年では一般に養殖ブリをハマチと呼ぶ。」と記載する。このような語彙に付随する文化的な面もおもしろいところで、そういう気付きが出てくると楽しくなる。しかし、これらは高学年の段階であろう。いずれにせよ、低学年は「身近なことを表す語句の量を増す」と「意味による語句のまとまりを知る」という点に焦点を絞って語彙を増やすこととその意味を知り、それを使って文章に表現して書いてみて表現語彙へ変えていく指導を行う。

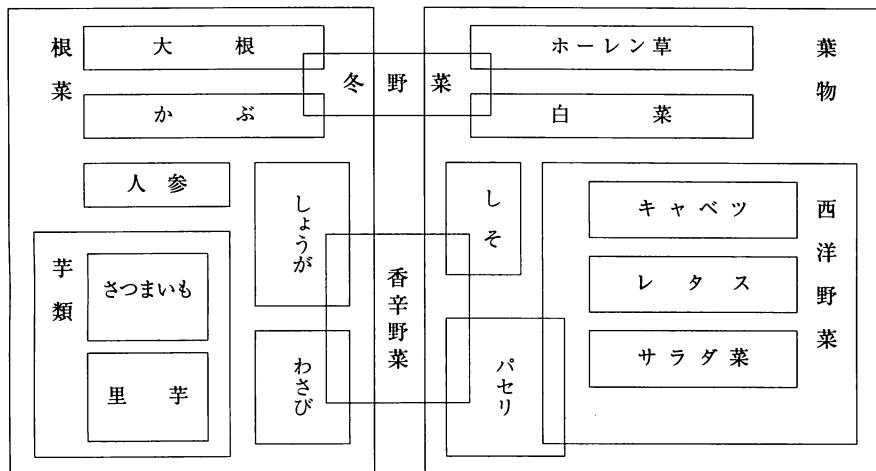
次に、「ミルク」「ジュース」「水」「緑茶」「麦茶」「ウーロン茶」「酒」「ビール」「ワイン」「焼酎」のグループは、図2の分類になる。ここで注意したいのは、アルコール飲料の中に「酒2」があり、これは「日本酒」のことを指している。しかし、「酒」がアルコール飲料の総称として使用されている。それが「酒1」である。「酒」は狭義では「日本酒」、広義では「アルコール飲料」の総称となっている。「車の運転をするならお酒は飲まないように。」という例は広義の意味で使用されている。このように狭義と広義の意味があるものもある。この点は高学年での学びになろう。

図2



もう一つ、「野菜の語彙」の例を田中章夫『国語語彙論(注3)』から引用して図3に示す。それによると、野菜を「根菜」と「葉物」に大きく分け、そこから「冬野菜」や「香辛野菜」「西洋野菜」「芋類」に分けている。小学生にはこれらの意味の分類は難しい。しかし、野菜の語彙を集めて並べていくと、表六に示すような状況になり、いくつかの特徴があるのに気がつく。その一つは、現代の野菜には外来語が多いということである。サラダを食べるようになった昭和五〇年代頃から西洋野菜が入ってきた。また、白菜・春菊・胡瓜・人参・菠薐草など、中国から入ってきた漢語の野菜が多い。和語の野菜があまり多くないことも特徴である。なお、「大根」は「おおね」を音読みした和製漢語である。「白菜」は、中国北部原産と考えられ

図3 野菜の語彙 (田中章夫『国語語彙論』10頁)



る重要な蔬菜で、日本には明治時代に導入され、改良された結果、大正時代になって次第に全国に普及するようになった。「春菊」は、地中海沿岸原産で若葉は食用にされる。「オランダ菊」ともいう。「胡瓜」は、インドでは三千年以前から栽培していて旧約聖書の民数記にも登場する。中国には漢の頃、張騫が西域から持ち込んだと伝えられ胡瓜と表記

された。「人参」は、日本には中国から伝わり、古くから栽培されている主要な野菜である。「菠薐草」の「菠薐」は唐宋音でネパールの地名、日本に約三百年前に伝来した在来種と明治期に導入された西洋種とあり、両者の雑種も普及している。「ジャガイモ」は、南アメリカ高地の原種から、ヨーロッパで作り出された栽培作物、日本には慶長三年（一五九八）オランダ船がジャカルタから伝えたもの。「カボチャ」は天正年間（一五七三〜九二）中国を経て九州に伝わった。カンボジア原産と考えられていたのでこの名前がある。「キャベツ」は、ヨーロッパ原産、日本では明治期から栽培されている。「レタス」は、英語 [Lettuce] チシャの園芸品種群で、日本には江戸末期に渡来した。ヨーロッパ原産。「ピーマン」はフランス語 [piment]。このような語彙の特徴に気がつくとおもしろくなる。（小学館『日本国語大辞典』（第二版）を基に記述）

表六 野菜の語彙

和語	和製漢語	漢語	外来語
さといも（里芋）・さつまいも（薩摩芋）・かぶ（蕪）・なす（茄子）	大根（おおね・ダイコン）	白菜（ハクサイ）・春菊（シュンギク）・胡瓜（キュウリ）・人参（ニンジン）・菠薐草（ホーレン草）	ジャガイモ（ポテト）・カボチャ・キャベツ・レタス・トマト・セロリ・ピーマン・アスパラガス

四の2 様子を表す語句と対義語

「第3学年、及び第4学年」の中で「様子を表す語句（形容詞・形容動詞・副詞）」に着目して、その中でも「形容詞」に関して述べる。形容詞にはク活用とシク活用があるが、今、それらをアイウエオ順に取り上げて、対義語を持つ語は括弧で補って示すと表七のようになる。

形容詞を網羅したわけではないが、アイウエオ順に思いつく語をあげた。形容詞の分類は、属性形容詞と感情形容詞に分類できる。属性形容詞は、その事物の性質・状態を表し、古典文法ではク活用になるのが多いといわれ、感情形容詞は人の感情・感覚を表し、古典文法ではシク活用となる語に多いといわれる（注4）。表七を眺めてみると、ク活用の形容詞に属性形容詞が多く、シク活用形容詞に感情形容詞が多いという傾向はみえる。しかし、全てがそうではないので、そこにはあまりこだわらないで、集めた形容詞を「ーい」になるものと「ーしい」になるものに分類してその特徴を見えるということでもいいと思う。その中で対義語が見つかるのを掲載するとク活用の方が、すぐに対義語が見つかるのが多い傾向がある。シク活用の方は対義語がすぐに見つかるのが少ない。「様子を表す語句」の形容詞は対義語と関連させて取り上げると語彙の増量と特徴を捉えるのに効果的である。シク活用の方は対義語が見いだしにくかったり、品詞が違ったりする

表七 ク活用とシク活用の形容詞

シク活用	ク活用
新しい（古いク活用）、忙しい（暇だ形容動詞）、嬉しい（悲しい）、美しい（醜いク活用）、うらやましい、おかしい、奥床しい、おもしろい、きびしい、悔しい、苦しい、寂しい（楽しい？）、涼しい（暖かいク活用）、せわしい、騒々しい（静かだ形容動詞）、ただたどしい、妬ましい、激しい（ゆつくり副詞、ゆったり副詞）、等しい、まどろっこしい、やかましい（静かだ形容動詞）、ややこしい（簡単だ形容動詞）、喜ばしい、e t c.	青い、赤い、浅い（深い）、熱い（冷たい）、暑い（寒い）、厚い（薄い）、暖かい（涼しいシク活用）、甘い（からい）、ありがたい、いたい、うるさい（静かだ形容動詞）、えらい、多い（少ない）、惜しい、遅い（早い）、重い（軽い）、固い（柔らかい）、かゆい、可愛い（憎い）、汚い（きれい形容動詞）、きつい（ゆるい）、清い（汚れた動詞）、くさい、けむい、白い（黒い）、素早い（のろい？）、するどい（にぶい）、せこい、せつない、狭い（広い）、高い（低い）、だるい、近い（遠い）、強い（弱い）、つらい（楽だ形容動詞）、ない（ある動詞）、長い（短い）、はがゆい、ひどい、太い（細い）、古い（新しいシク活用）、ほしい、まるい、もろい（頑丈だ形容動詞）、よい（わるい）e t c.

ものが多いという特徴が見える。

「対義語」の説明（注5）をすると、対義語には次のような様々なタイプがある。

（a）相補関係：「男」と「女」、「ある」と「ない」、「等しい」と「異なる」のようなペアで、ある意味の枠の中で、概念の領域を二分するもの。一方が肯定されれば、他方が

否定される関係がなりたち、この関係は、動詞の文法範疇の肯定―否定の関係と重なる。

(b) 両極関係…「頂上」と「ふもと」、「始まり」と「終わり」、「満点」と「零点」のようなペアで、空間・時間やなんらかの数量上の両極を表す単語間になりたつもの。

(c) 程度性を持つ対義語…「大きい」と「小さい」、「重い」と「軽い」、「ぬれた」と「乾いた」のようなペアで、ものごとの性質を相対的に表していて、両者の差は程度の問題である。

(d) 反照関係…「上り坂」と「下り坂」、「行く」と「来る」、「売る」と「買う」のようなペアで、一つのものと異なる視点から名づけた単語間になりたつもの。「教える」と「教えられる(＝教わる)」、「授ける」と「授けられる(＝授かる)」もこの仲間であり、動詞の能動形と受動形の関係と重なる。

(e) 前提関係…「先生」と「生徒」、「医者」と「患者」、「親」と「子」のようなペアで、互いに相手の語を前提に名づけられたもの。

(f) 変化に関する対義語

(1) 位置の変化…「あがる」と「さがる」、「入る」と「出る」、「前進」と「後退」のようなペアで、空間上の変化が逆方向である。

(2) 状態の変化…状態の変化「寝る」と「起きる」、「結

ぶ」と「ほどく」、「生産」と「破壊」のようなペアで、相互にもとの状態に移行する関係である。

(78～79頁)

このように対義語には、名詞の場合、動詞の場合、形容詞の場合がある。対義語の分類は単純に反対語ではなくて対になっている語のペアという意味である。よって、意味の問題が関連してくるので低学年では難しく、高学年での指導がよいと思われる。その中で形容詞に関しては、中学年の三、四年生でもわかりやすいと思われるので、形容詞の語句と対義語(ここでは「程度性を持つ対義語」)を組み合わせると取扱やすいと考える。

四の3 慣用句と国語辞書の利用

『第3学年、及び第4学年』には、「(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。」として、「イ 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと」があげられている。三年生の一学期に国語辞典の使い方を学ぶ。辞書の活用は理解語彙の増加に役立つ。三年生の二学期に慣用句を習う。ここでは慣用句を例に取り上げる。

『改訂版 日本語要説』(注6)によれば、

「馬があう」「道草をくう」「図に乗る」「口が軽い」と

慣用句は、形式上は単語の結合体であるけれども、意味上は要素に分割できず、その結びつきは固定的で、全体で単語に相当するものである。(74頁)

とある。慣用句の中には身体の名詞を含んだものと動物名詞を含んだものが多くある。まず、「目」を取り上げて子ども達に慣用句を五つ出させてみよう。なかなか出てこないものである。クラスで出させた後で国語辞書を引いてみると以下のように多くの目を含んだ慣用句が載っている。

目が利く／目が肥える／目がくらむ／目が覚める／
目が高い／目が無い／目に余る／目に立つ／目に付く／
目に見えて／目にも留まらぬ／目にも物を見せる／
目の敵／目の薬／目の毒／目の付け所／目も当てられない／
目もくれぬ／目を疑う／目を奪う／目を掛ける／
目を白黒させる／目を付ける／目を通す／目を盗む／目
を光らせる／目を塞ぐ／目を見張る／目を剥く
ざつと三〇の慣用句が載せられている。これらの意味を確認して単文に使用して発表させて表現語彙に変えていく。このほか、「耳」「鼻」「口」「肩」「腕」「足」「こころ」「気」など慣用句が多い。

このほか、動物を含んだ慣用句として「猫をかぶる」「虫がいい」「雀の涙」「犬も食わぬ」「牛の歩み」「狐につままれる」「鶴の一声」などもある。ほかにも「油を売る」「埒があかな

い」「うだつが上がない」などは歴史的な説明が必要である。国語辞書を利用しつつ語彙指導を行いたい。

四の4 諺と故事成語

先に示したように、「諺」と「故事成語」も「第3学年、及び第4学年」の「(3) 我が国の言語文化に関する」事項にあげられている。「図解 日本の語彙」(注2)を参考にして一部紹介する。「諺」には民衆の生活の知恵、教訓、知恵が盛り込まれていて、簡潔な文句でできている。この頃間違つて理解し、使用されている「諺」を五つあげる。

- 1、情けは人のためならず 2、流れに棹さず
- 3、枯れ木も山のにぎわい 4、馬子にも衣装
- 5、濡れ手で粟

1に関しては、文化庁の平成22年度「国語に関する世論調査」があり、それによると次のようになってい

○(ア) 人に情けをかけておくと、巡り巡って結局は自分のためになる 45・8% (平成12年47・2%)

(イ) 人に情けをかけて助けてやることは、結局はその人のためにならない 45・7% (平成12年48・7%)

(ア) と(イ) の両方 4・0% (平成12年選択肢なし)

(ア)、(イ) とは全く別の意味

1・9% (平成12年選択肢なし)

分からない 2・6% (平成12年4・1%)

2は、例文「その発言は流れに棹さすものだ。」に関しては、平成24年の調査では、次のようになっている。

(ア)、傾向に逆らって、ある事柄の勢いを失わせるような行為をする

59・4% (平18年62・2%、平14年63・6%)

○(イ)、傾向に乗って、ある事柄の勢いを増すような行為をすること

23・4% (平18年17・5%、平14年12・4%)

(ア)と(イ)の両方

1・6% (平18年1・5%、平14年1・1%)

(ア)と(イ)とは全く別の意味

1・4% (平18年0・3%、平14年1・5%)

分からない

14・2% (平18年18・5%、平14年21・4%)

3の「枯れ木も山のにぎわい」は平成26年度の調査では、

○(ア) つまらないものでも無いよりはまし 37・6%

(イ) 人が集まればにぎやかになる 47・2%

(ア)と(イ)の両方 4・2%

(ア)と(イ)とは全く別の意味 3・4%

分からない 7・6%

とある。いずれも違った意味に理解されているのが多くなっ

ている。4、5に示した「諺」は、今のところ文化庁の調査は無いが、4は「馬子」を「孫」と誤り、5は「粟」を「濡れ手」からの類推で「泡」と誤るものである。これらは現代生活の中で「馬子」や「粟」が見られなくなり、使われなくなったことが原因であろう。これは慣用句の「檄を飛ばす」が次のように変化すると同じ傾向である。

○(ア) 自分の主張や考えを、広く人々に知らせて同意を求めること 平成19年19・3% (平15年14・6%)

(イ) 元氣のない者に刺激を与えて活気付けること

平成19年72・9% (平15年74・1%)

「檄文」が現代使用されなくなり、よく見る場面では「激励」の「激を飛ばす」がびつたりくるからであろう。こうして言葉は変化する。これらは文化庁の「国語に関する世論調査」にあり、インターネット上でも調査できて、調べ学習に使えるものである。この他にも多くの調査結果がある。

故事成語については、中国の故事が由来であるが、人生訓として知っておきたいものもあるのでいくつか示しておく。

1、天網恢恢疎にして漏らさず

(「老子一七三」の「天網恢恢、疎而不失」による)

天の網はひろく、その目はあらいようだが、悪人を漏らすことなく捕える。すなわち、天道は厳正で、

悪事をなしたものは早晚必ず天罰を受ける。

魏書―景穆一二王伝・任城王「又曰、天網恢恢、疎而不_レ漏」。〔小学館『日本国語大辞典』〔第二版〕〕

2、瓜田に履を納れず、李下に冠を正さず

3、君子は危うきに近寄らず 4、君子は独りを慎む

5、人間万事塞翁が馬 6、破天荒

教養の平成29年前期（第1ターム）で大学生に授業をしたが、故事成語にも馴染みはないようで知らない学生が多かった。2～5は有名であるので説明は省略する。尚、6「破天荒」については、平成20年度の文化庁「国語に関する世論調査」に調査があり、次のような結果であった。

破天荒（例文…彼の人生は破天荒だった。）

○（ア）だれも成し得なかったことをすること 16・9%

（イ）豪快で大胆な様子 64・2%

（ア）と（イ）の両方 5・4%

（ア）、（イ）とは全く別の意味 1・3%

分らない 12・2%

四の5 熟語の構成（接頭語・接尾語・複合語・連濁等）

「第5学年、及び第6学年」には、「思考に関わる語句の量を増す」「語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解する」「語感や言葉の使い方に対する感覚を意識する」が示されている。

「思考に関わる語句の量を増す」事については、文章構成の中で筆者の論理展開に関わる接続語やまとめに導く言葉（このように、つまり、要するに）に着目するとともに、文末の（思う、考える、のではないか、のだ、のだろう）など「のだ」文を含めたモダリティ表現に着目することであるが、その点については別の機会に述べるとして、ここでは「語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解する」について例を示す。新学習指導要領の国語の解説には、

語句の構成については、お米の「お」のような接頭語、

お父さんの「さん」のような接尾語のほかに、複合語、

略語、慣用語なども含んでいる。語句の変化については、

例えば、「花+畑」で「ハナバタケ」というような音の変

化、「帰る+道」で「帰り道」というような語形の変化な

どがある。（119頁）

とあり、接頭語や接尾語、複合語に見える「連濁」や語構成による語形変化にも目配りをしている。

接頭語の「御」は美化語との関係もあり、敬語との関わりがある。基本的に、「御」には次のルールがある。

1、和語には「御（お・おん（古い）・み（古語的）」が付く

2、漢語には「御（ゴ・ギョ）」が付く

3、外来語や擬声語・擬態語には付けない

1は、表八に示すように「御（お）」は名詞、動詞、形容詞、

形容動詞にも適用される。「御(おん)」は平安期の「おほん」から「おん」、そして「お」と変化してきたもので古い形なので例は少ない。しかし、「御礼・御身・御地・御中」など手紙文関係に使用されて丁寧さが少し「お」より高い印象が有り使用されている。また、「御社」は昔は「貴社」であったが新たにサラリーマン社会で近年使用されはじめた。「御(み)」は古語にあったものでそれが化石的に残存する。「御国(↓御國)」「御髪(↓御髮)」のように古典では「御(み)」であったものが「御(お)」へと変化している。「御(おん)」と「御(み)」は古いものなので名詞につくものが大半である。

表八 和語に「御(お・おん・古い)・み(古語的)」が付く例

(お) 御	お手紙・お体・お米・お水・お読みになる(尊敬)・お届けする(謙譲)・お美しい・お健やかに……
(おん) 御	御礼・御身・御地・御社(貴社↓御社)・御中・御大(親愛・嘲笑)……
(み) 御	御籤・御子・御簾・御霊・御手洗・御幸・御代・御国(↓御國)・御髪(↓御髮)……

2の漢語に「御(ゴ・ギョ)」が付く例を表九に示す。名詞、動詞、形容動詞に見える。「御(ギョ)」は皇室関係に残るものが多い。

表九 漢語に「御(ゴ・ギョ)」が付く例

(ゴ) 御	ご挨拶・ご機嫌・ご結婚・ご祝儀・ご指示・ご指導くださる(尊敬・ご教示いただく(謙譲)・ご安泰・ご健在だ……
(ギョ) 御	御意・御苑・御霊・御製・御名・御物(ゴモツ)ともいう……

漢語(重箱読み・湯桶読み)に「御(お)」が付く例を表十に示した。漢語には本来は「御(ゴ)」が付くのであるが、日本の生活に馴染んでくると「お」が付くようになる。漢語が日本語の中に馴染んできた証とみてよいであろう。重箱読みに「お」が付く例が多く見つかる。なぜか湯桶読みに「お」が付く例は少ないようである。

表十 漢語(重箱読み・湯桶読み)に「御(お)」が付く例

御(お) + 漢語	お綺麗・お元氣・お食事・お洗濯・お掃除・お茶碗・お人形・お弁当・お料理……
お + 重箱読み	お氣持・お具合・お献立・お座敷・お仕事・お雑煮・お台所・お役目……
お + 湯桶読み	お色氣・お指図・お家賃……

3の外來語や擬声語・擬態語については基本的につかないが、一部の外來語に付くようになってきている。「おトイレ」「おビール」「おソース」等である。「おトイレ」の場合は美

化語として認められているようであるが、「おビール」「おソース」の方は過剰敬語という意識もあり、平成17年の文化庁の「国語に関する世論調査」では次のようになってい

問8. どんな語に「お」を付けるか

ふだんの言葉遣い（「お」を付けるか、付けないか）

「お菓子・お酒・お米・お皿・お弁当」は半数以上が選択。「おくつした・おビール・おソース・おかばん・お紅茶」は少数派――

「お」を付けないで言う」が「お」を付けて言う」よりも多いのは、「くつした」「ビール」「ソース」「かばん」「紅茶」「手紙」「薬」「天気」である。このうち、「くつした」「ビール」「ソース」「かばん」「紅茶」は、「お」を付けないで言う」が9割以上に達する。

このほか、接頭語（注8）には「お」のほかに、「か弱い」「小さい」「ど派手」「素顔」「真水」「反体制」「アンチ巨人」のほかに「不人気」「無表情」「非常識」「未成年」などがあり、接尾語（注9）には「春めく」「大人ぶる」「弱さ」「強がる」「子どもっぽい」「男らしい」「神様」「君たち」「五人」「三枚」「一匹」などがある。これらの語彙を集めて意味を辞書で確認していくといいただろう。

複合語（注10）に関しては、その品詞は多くの場合、その最終要素となり、複合名詞（酒屋、船宿、木葉）、複合動詞（押し

倒す、倒れ込む、走り出す）、複合形容詞（重苦しい、高い）、複合形容動詞（声高、話し上手）、複合副詞（心持ち、なおかつ）等がある。中でも複合名詞が多く、次が複合動詞でその他は少ない。被覆形（酒屋、木葉、炎）と露出形（酒、火）等も複合語と一緒に取り扱うとよい。

連濁（注11）については語構成が関係し、「山」と「川」が並列の場合は「やまかわ」と濁らず、「山にある川」の意の場合は「やまがわ」と濁る。連濁が起る場合と起らない場合では意味が異なることがある。連濁している方が熟合度が強い。連濁については法則が立てにくい、次の指摘がされている。

（1）複合語の後部要素に濁音がある場合、連濁はおこらない。（手づき、合いことば）

（2）後部要素が漢語である場合、連濁はおこりにくい。

（例外…黒ザトウ・和ガシ）

（3）疊語の中、擬声語・擬態語で連濁はおこらない。

（ころころ・そろそろ）

（4）漢語にサ変動詞（シ・スル）が交接する場合、鼻音韻尾の後では連濁する（*がそれ以外は連濁が起りにくい。（解スル・訳スル）

以上は和語の場合であるが、漢語の場合も
*（重んじる・応じる（堀畑補））

(5) 漢音系にくらべて、呉音系字音は連濁しやすく、前部要素のアクセントが上昇調の時に著しい。またアクセントが平板調の場合は連濁しにくい。

(6) 二字の漢語サ変動詞は「ゝスル」であり連濁形をとりにくい。(成長スル・誕生スル)

(7) 「名詞＋動詞連用形」において、「角刈り」のような連用修飾の場合は連濁しやすく、「草刈り」のような格関係を示す場合は連濁しにくい。

連濁に関しては一般化した法則が立てにくいようである。なお、私の姓は「堀畑」であるが、語構成が「堀り(動詞)＋畑(名詞)」の場合は「ほりはた」と連濁しない。「堀の端」のように「名詞＋の＋名詞」の場合は「ほりばた」と連濁する。いろいろな用例を集めて検討してみるとおもしろい。

複合語に関しては多くの研究があるが、今回は小学校の語彙指導なので割愛する。中学校の語彙指導で取り上げたい。

五 おわりに

小学校の語彙指導と題して日本語学の立場から理論を取り上げ、例を示してきた。小・中学校の語彙指導は螺旋的に高度化している。今後とも日本語学の方から語彙指導に関する事項と事例の掘り起こしを行って、子どもの発達年代に応じた語彙指導を提示していきたい。

注

1、『小学校学習指導要領解説 国語編 平成29年6月 文部科学省』45頁参照。

2、阪本一郎(一九五五)「読みと作文の心理」(牧書店)。

3、田中章夫『国語語彙論』(明治書院、一九七八年) 10頁。

4、沖森卓也他著『図解 日本の語彙』(三省堂、二〇一一年)(沖森卓也氏執筆) 39頁参照。

5、工藤浩他編『改訂版 日本語要説』(ひつじ書房、二〇〇九年六月初版)「第3章 現代語の語彙・語彙論」(村木新次郎氏執筆)。

6、注5に同じ。(村木新次郎氏執筆) 74頁参照。

7、注4に同じ。(木村義之氏執筆) 162頁参照。

8、飛田良文主幹編者他『日本語学研究事典』(明治書院、二〇〇七年一月初版)(斎藤倫明氏執筆) 166頁参照。

9、注8に同じ。(斎藤倫明氏執筆) 167頁参照。

10、注8に同じ。(石井正彦氏執筆) 169頁参照。

11、注8に同じ。(菊田紀郎氏執筆) 356頁参照。尾名池誠「ライマン氏の連濁論」原論文とその著書について」(『百舌鳥国文』

一一一九九一年)も参照。

参考・文化庁「国語に関する世論調査」

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokei-hosa/kokugo_yoronchosa/index.html

(ほりはた・まとおみ 熊本大学教育学部教授)